

2020. 8. 2 第一主日礼拝

I コリント 4:1-5 「神の奥義の管理者」

聖書

- 1 人は私たちをキリストのしもべ、神の奥義の管理者と考えるべきです。
- 2 その場合、管理者に要求されることは、忠実だと認められることです。
- 3 しかし私にとって、あなたがたにさばかれたり、あるいは人間の法廷でさばかれたりすることは、非常に小さなことです。それどころか、私は自分で自分をさばくことさえしません。
- 4 私には、やましいことは少しもありませんが、だからといって、それで義と認められているわけではありません。私をさばく方は主です。
- 5 ですから、主が来られるまでは、何についても先走ってさばいてはいけません。主は、闇に隠れたことも明るみに出し、心の中のはかりごととも明らかにされます。そのときに、神からそれぞれの人に称賛が与えられるのです。

はじめに

パウロはコリント教会の最初の問題である分裂・分派について扱った上でいくつかの補足をしているのが4章です。3章の締め括りで、使徒と呼ばれる神の働き人は、パウロであれ、アポロであれ、ケファであれ、人につくものではなくキリストのものであり、神のものであることを確認しました。パウロ、アポロ、ケファに代表される使徒は、神さまに仕え、教会に仕えるものであり、それゆえに使徒には「神の奥義の管理者」としての責任が負わされていることを述べています。今朝は使徒が持つ管理者としての自覚を学びながら、それは今日の私たちにも通じるものであることを知りたいと思っています。

1. 使徒とは？

聖書には「使徒」ということばが出てきますが、そもそも使徒って何でし

ようか。使徒とは「使者、大使、特別な使命を帯びて派遣された者」という意味を持つ語で、イエスさまによって直接弟子として任命された者たちのことを指します。彼らはイエスさまの弟子であるだけでなく、イエスさまの復活の証人であり、その証言をもって宣教に携わった者たちです。イエスさまは最初に 12 人の弟子を選び、12 使徒と名づけられました。イエスさまの十字架を前にイスカリオテ・ユダは自死しましたので、その代わりにマツテヤが選ばれ、使徒職を継承したのです。この 12 使徒の中にパウロは含まれていません。それゆえにパウロに反対する者たちからは彼の使徒職にしばしば疑問の目が向けられました。しかしパウロは「人々から出たのではなく、人間を通してでもなく、イエス・キリストと、キリストを死者の中からよみがえらせた父なる神によって、使徒とされたパウロ…」(ガラテヤ 1:1) と自らの使徒職が神から与えられたものであることを明示しています。

私たちはイエスさまの時代の使徒という意味では使徒と呼ばれる者ではありません。しかし、イエスさまに召された者であり、かつ復活の証人として福音宣教に携わるキリストのしもべ(弟子)という意味でいうなら、使徒としての性格を帯びているのです。パウロが持っていた自覚は、今日のクリスチャンにも当てはまるのです。

2. しもべであり管理者

パウロは自らを「キリストのしもべ、神の奥義の管理者」と自覚していますが、この認識をコリント教会の人たちにも持って欲しいと願っていました。4:1 の欄外注を見ますと「こういうわけで、人は…」とあり、使徒はキリストに、すなわち神に仕えるしもべであることを強く意識させているのです。そのしもべには、神に対して忠実であることが求められ、それを管理者ということばで表しました。

しもべとはもともとの意味は、ガレー船の漕ぎ手を指す奴隷を指し、身を粉にして下働きする者です。キリストのしもべとは、イエスさまのために身

を粉にして働く者です。クリスチャンはみなキリストのしもべの一人として世に存在しているのです。そうするとある人は、私はイエスさまのために何もしていないけど…と言うかもしれません。もし、そのような思いを持っている人がいたら、今日この礼拝でその意識を変えていただきたいと思います。つまり礼拝こそ、私たちがしもべであることを最も忠実に表している場だからです。私たちはこの礼拝でイエスさまの前にしもべとしてひれ伏しているのです。イエスさまのしもべという意味で礼拝はクリスチャンの生命線と言えるでしょう。

もう一つ大切なのは忠実な管理者という意識です。管理者（ギ：オイコノモス）は家をつかさどる者、執事という意味で、その人には忠実であることが求められます。家の管理を任せる人が不忠実だったら大変なことになってしまいます。イエスさまはルカ 12:42-47 で「忠実で賢い管理人」の話をしておられます。忠実で賢い管理人は食事時には召使いたちに決められたように与えるものであり、逆に不忠実な管理人は主人の帰りを気にもせず、召使いたちを打ち叩き、自分たちは飲み食いにはふけるような者だと言われました。忠実な管理人がほめられているポイントは「主人が帰って来たときに、そのようにしているのを見てもらえるしもべは幸いです。」（ルカ 12:43）にあります。主人がいつ帰ってくるのか分からない中でも、いつも通りなすべき務めに当たっている姿を見てもらえることが大切なのです。

イエスさまがルカ 12:43 で言われた忠実な姿を見てもらえることの大切さをパウロは I コリント 4:2 で「忠実だと認められること」だと言いました。誰に見てもらうのか、誰に忠実だと認めてもらうのか、そこが重要になってきます。パウロは主に見てもらうこと、主に忠実だと認めてもらうことに集中していたのです。

3. 主に対して責任を負う者

管理人は誰に対して責任を負っているのでしょうか。それは任せてくださ

った主人に対して負っているのです。別の言い方をしますと、主人によってのみさばかれる（評価される）ということです。ですから、人間によるさばきや評価は意味を持たないということになります。「人間の法廷でさばかれたりすることは、非常に小さなことです。」（3節）。しかもそれは人からの評価のみならず、自分で自分を評価することにも意味を持たないと言っています。「それどころか、私は自分で自分をさばくことさえしません。」（3節）と。「私をさばく方は主です。」（4節）と、誰に対して責任を負っているのかを明確にし、その方が一人一人を正しく評価してくださるのだから、自分の判断で勝手に人をさばき評価してはいけないのです。

主に仕えるお互いにとり、誰の目を意識しているのか今一度問いかけてみましょう。私たちは人に仕えるものではありませんが、人を通してイエスさまに仕えているのです。目の前の人の存在が大きくなりすぎると、イエスさまに仕えている意識が薄くなり、人からの評価が気になるようになります。そうすると、自分で自分の奉仕を評価したり、人の奉仕を評価したりするようになり、そこから自分に対して、また人に対してさばきが始まってしまいます。こうした罫から守られるために、私たちは主のしもべであり、主から管理を託された者であり、主に対して責任を負っていることを自覚する必要があります。

4. 主の前に歩もう

信仰者であるお互いは、主の前に生きていることを確認し、新しい週を出発しましょう。詩篇 16 篇には主の前に歩む者の幸いが記されていますので、抜粋してメッセージを締め括ります。「あなたこそ 私の主。私の幸いは あなたのほかにはありません。」（2節）、「私はいつも 主を前にしています。主が私の右におられるので 私は揺るがされることはありません。それゆえ私の心は喜び 私の胸は喜びあふれます。私の身も安らかに住まいます。」（8,9節）。

私たちは主を前にしています。それは人生の様々な決定権を主に委ねることを意味しています。また私たちは主を右に置いています。右は保護と信頼を表します。右手は剣を持つ手です。その剣を持つ手の側に主がおられるとはどういうことでしょうか。私の右手の剣を封印し、主自らが戦ってくださるということです。神さまが私の代わりに戦ってくださるので、私たちは平安のうちに、喜び楽しむことができます。

これが私たちの信じる神さまであり、この方の前に歩んでいることを忘れないようにしましょう。主のしもべであり、管理者としての自覚は、主の前に歩むことを意識する中から生まれて来ます。パウロは主の前にしもべであり管理者であることを自覚していたので、何事も先走った考えをせず、すべてをご存知の主の委ねて歩むことができました。「主が来られるまでは、何についても先走ってさばいてはいけません。主は、闇に隠れたことも明るみに出し、心の中のはかりごと明らかにされます。そのときに、神からそれぞれの人に称賛が与えられるのです。」(5節)。主の前に歩む地道な一日一日が、やがて主の前に立つときの称賛につながることを覚えて、真実に歩み続けたいと思います。「よくやった。良い忠実なしもべだ。」(マタイ 25:21, 23)との主からのお褒めの言葉が用意されていることを先取りして、今週も信仰によって歩みましょう。

まとめ

分裂・分派論争から始まった、人ではなく神の前に歩む生き方を私たちも学ばせて頂きましょう。「人はうわべを見るが主は心を見る」とあるように、主は私たちの心の中も、また行きもすべてをご存知で、正しく評価してくださる方です。人からの指摘や忠告にも耳を傾ける柔らかさは必要ですが、人の意見や評価がすべてではありません。真のさばき主である主イエスさまの前に真実に歩む信仰者でありましょう。